

「商店街NEXTチャレンジャー育成事業（2期生）」

【第1回研究会】

日時：令和元年6月26日（水）18：00～20：00

会場：福岡商工会議所ビル2階 第2研修室

《参加者》48名

■商店街関係者（15名）

■商店街での出店を考えており商店街の活性化に興味がある方（2名）

■商店街の活性化に興味がある方（20名）

■メンター（1期生）7名

吉川 和毅（川端中央商店街振興組合）、青柳 ゆうこ（香椎駅前商店街）、仲盛 弘樹（香椎駅前商店街）
呉 基弘、矢野 裕樹、谷口 真、斉藤 康平、

■コーディネーター等》

木藤 亮太（(株)ホーホウ 代表取締役）、松木 治子（(株)ホーホウ）

杉本 宏幸（福岡大学商学部 教授）、飛田 努（福岡大学商学部 准教授）

1.開会

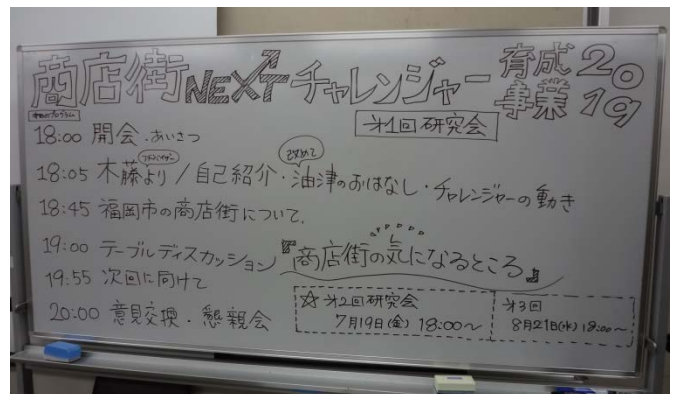
木藤さん：この研究会はセミナーや講演会とは異なり、参加者自ら考え、体験するプログラムになっている。この会には、商店街の方だけでなく、いろんな立場の方が参加しており、交流しながら、議論を進めていくことができるのがメリットである。

今村部長（福岡市経済観光文化局総務・中小企業部長）

：この研究会は昨年度から実施しており、私も毎回参加させてもらっている。

新たな2期生の方と一緒に議論していきたいと思っている。

木藤さん：私は宮崎県日南市に一つだけある商店街「油津商店街」を4年間で元気にするというプロジェクトに参加したが、福岡市には120を超える商店街があり、みなさんと一緒に試行錯誤しながら議論していきたい。



2.油津商店街の取組み（木藤氏）

・福岡市は「FUKUOKA NEXT」として、スタートアップなどに力を入れているが、商店街も次のステージに歩いていく必要がある。

・チャレンジして新しいことに取組むということをおみなさんと一緒に描いていくことが必要と思う。

・2013年から宮崎県日南市の油津商店街に行き、シャッター街の商店街を立て直すプロジェクトに参加し、4年間でいろんな新しいお店や市民が集う場所ができた。



・油津商店街も昭和40年代は、漁港と駅をつなぐ商店街として、たくさんの人が通り、お店もたくさん並んでいたが、車社会が進んだことや漁港の衰退などから、自然と商店街からも人が減っていき、いわゆるシャッター街になっていった。

・喫茶店をカフェにリノベーションしたり、空き地にコンテナを並べお店を入れていくこと、スーパーの跡地に食堂やレンタルスペースを作ったりした。

・特徴としては、商店街を運営する株式会社をつくり、応援する市民の方から出資を集め、会社が収益をあげながら、商店街をマネジメントするという仕組みをつくった。

・日南市は広島カープのキャンプ地でもあることから、キャンプを見に来る方を商店街に引き込むためにマップを作ることで、これまで商店街を知らなかった方が「知る」ということで、商店街に人が流れるようになった。

・商店街で消費してもらうために、カープに関連することを商店街やまち全体で取り組むようになり、商店街と球場をつなぐ道を赤くしたり、油津駅を赤く塗ったりした。

・未利用の空間をいかに活用するか、また、地域に集まる資源を消費や経済に変換にしていくなど、眠っていた地域資源を掘り起こした。

・日頃のにぎわいとしては、IT企業のオフィスが商店街の空き店舗に入居し、企業誘致と商店街の再生が上手くコラボレーションすることができた。

・オフィスで働く方のほとんどは地元の方で、100人以上の方が商店街で働くようになったことで、商店街でランチを食べる、飲み会をするなど、商店街での若い世代の消費人口が増えた。

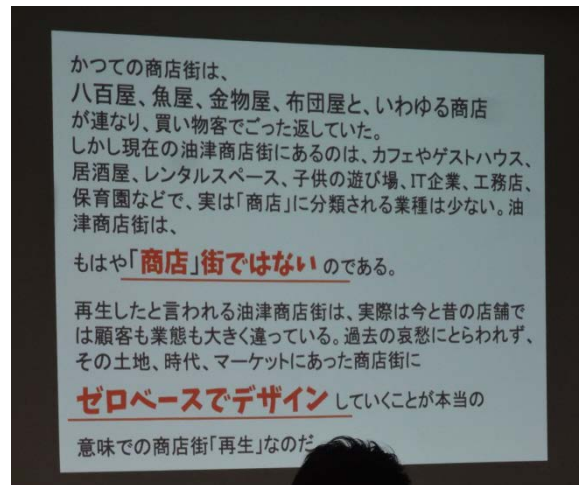
・働く若い女性が増えると、自然発生的に保育園が商店街の中に誕生し、IT企業の前に保育園があるという、かつての商店街では見られないような光景もある。

・スーパーの跡地を改修し、屋台村やフリースペース、有料のレンタルスペースを作り、商店街で買い物や食事以外の目的でも足を運べる空間をつくった。

・商店街で子供たちが踊っている部屋、壁を挟んで宴会をしている部屋、その向こうには飲食店があり、同じ商店街でいろんな人の活動が生まれ、自然に交流が生まれてくるようになった。

・商店街は通りに色んなお店が並び、買い物や食事をする場所であるが、時間を過ごす、交流することも昔の商店街の機能であったと思う。それを現代風にアレンジ、表現できたのではないかと思う。

- ・学生が運営するゲストハウスが商店街の中にでき、油津商店街発のアイドルグループが生まれ、小学生でも商店街を応援してくれている。
- ・油津商店街は「再生した」という記事もあれば、「再生したわけではない」といった記事もある。
- ・かつての商店街は、八百屋、お肉屋、魚屋など、当時生活に必要なお店が並び、歩いて商店街に行き、それが人通りになっていた。
- ・ライフスタイルや物の価値観が変わっていく中、商店街にカフェやゲストハウス、IT企業ができ、保育園ができ、もともと商店街のいわゆる商店ではないようなものがたくさんできている。
- ・人口が減り、若者が減っている中で、働く場所も含め商店街に本当に必要なものができたと思うが、それは「かつての商店街ではない」といった言われ方もされる。
- ・かつてにぎわいのあった、輝いていた商店街に「再生する」というと、過去の良かった頃に戻るといった思考回路になるが、昔のような商店街に戻れるかということそれは難しいのではないかと思う。
- ・再生するということではなく、改めて今に時代に必要な商店街やまちを創っていくことが必要と思う。
- ・商店街が今後どうなっていくべきなのか、商店街を再生するということがどういうことなのか、みなさんと議論していくことが必要と思う。
- ・油津商店街と福岡市の商店街は環境も異なるが、世代交代など同じような課題、同じような共通点もあると思う。
- ・人口が減っていく時代で、油津商店街の取組みから学ぶべきことがあると思う。
- ・この研究会では、福岡大学の商学部先生にもサポートに入っただき、ビジネス、マーケティングの観点も交え議論していきたい。
- ・この研究会はプログラムを固定せず、参加者の現状や課題、悩みなどを把握しながら、みなさんとどう進めていくのかを考えていきたい。
- ・昨年の研究会では、市内のいろんな商店街の方が参加される中、近くの商店街や隣の商店街のことをよく知らないという方が多く、横のつながりが少ないということを感じた。
- ・また、参加者が「何かを変えていく必要がある」という想いが強いということを感じた。
- ・参加者同士のつながりや、商店街の垣根を越えて、新しい若い世代のコミュニティをつくりながら、一緒に議論し、客観的に見る体験することで、気づくというプロセスも必要と思う。
- ・外側から自分達の商店街を客観的に見ることで目を養いながら、それをみんなで共有することで、新しいチャレンジにつながっていけばと思う。
- ・全9回の研究会の中で、チームに分かれ調査をし、議論した結果を発表することも予定している。



- ・今年の研究会には、昨年の1期生の方にもメンターとして参加してもらうことにしている。
- ・1期生の方の活動や昨年の研究会の活動をいくつか紹介する。
- ・大橋商店街の渡邊さんは、一般社団法人を立ち上げ、イベントを企画するなど、大橋のにぎわいづくりに取り組んでいる。
- ・箱崎商店街の斉藤さんは、地元箱崎を盛り上げるために会社を立ち上げ、箱崎の駅前でゲストハウスをしている。
- ・昨年の研究会では、柳橋連合市場を調査したチームは、一般の方が訪れにくいといった課題を解決しようと柳橋連合市場を知ってもらう「体験ツアー」を試行的に実施した。
- ・柳橋連合市場は、一般の方も購入できるが、お店など事業者向けの販売が中心となっていることから、プロが目利きすることを謳ったツアーを試行的に実施し、参加費は1人5000円であったが、参加者は非常に満足されていた。
- ・矢野さんは、創業支援の仕事をしており、西新の商店街に、手打ちそばとフレンチを掛け合わせたお店をしており、今回2店舗目となるお店を六本松に作っている。
- ・吉川さんのチームは、川端中央商店街、みのしま商店街、大橋商店街を比較調査し、それぞれの商店街の環境が異なるが、議論をしていく中で、共通しているものが見え、新しい提案につなげていくことができた。
- ・青柳さん、谷口さん、呉さんのチームは、箱崎と六本松の商店街を調査し、箱崎の九大跡地のまちづくりという規模の話になっていたが、チームとして様々な方にインタビューを行うことで、チーム内での横のつながりを深めることにつながった。



・私もこの研究会で知り合った1期生の仲盛さんと会社を立ち上げ、那珂川市の喫茶店を継ぐことにチャレンジしている。

・商店街という場所だけにこだわるのではなく、そこから次のステージをどう描くかということが重要であるということをお津での事業から学んだ。

・お津と福岡では環境は異なるが、課題を掘り下げれば、色々な問題点が見えてくると思う。

・それを新しい発想で変えていく方法を1期生も交えながら、みんなで考えていける場にしたい。



3.福岡市の商店街について（福岡市経済観光文化局地域産業支援課長 小山 隆）

・平成29年度に実施した商店街実態調査では、市内に138の商店街がある。

・商店街としては、協同組合、商店街振興組合、任意の商店街の組織、また、複数の商店街で構成される連合組織がある。

・商店街のタイプとしては、身近な買い物をする商店街（近隣型商店街、地域型商店街）が多い。

・アーケードのある商店街、大型商業施設のテナント会、店舗が連なっている商店街、地域の中で店舗が点在している商店街、ロードサイドの形態の商店街など、様々な形態の商店街がある。

・商店街の抱える課題としては、人材、店舗力に関する課題が多い。

・商店街は「地域経済の担い手」「地域コミュニティの担い手」としての役割がある。

・商店街が地域を支え、地域が商店街を支えるという好循環が商店街の活性化につながると考えている。

・商店街が取組むイベントなどソフト事業へ支援や、商店街の「食」をテーマに店舗や商店街を知ってもらう取組み、空き店舗の物件情報の提供、空き店舗への出店者への支援など、課題に応じた支援に取り組んでいる。



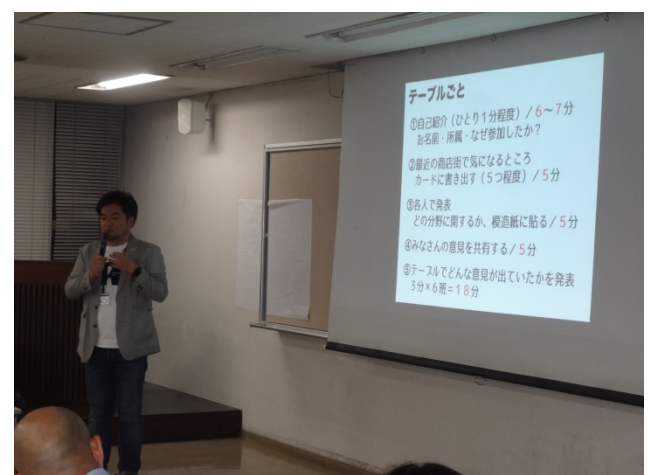
4.テーブルディスカッション

・商店街の気になるところ、問題点や課題、興味があることについて、付箋に記入し、その内容がどのジャンルに属するのか、10のジャンルに振り分ける。

【各テーブルでどのような意見が出たか発表】

・集客の話題が多かった。

・高齢の方のお店で開けているだけのお店がある。



- ・人通りがすくない、呼び込みをしない。
- ・居酒屋が多くなり、夜の街になってきている。
- ・世代の話、役員の高齢化
- ・親世代の昔からのやり方と子供世代の新しいことをしたいといった対立。
- ・お客さん目線では、商店街がどこにあるのか知らない。
- ・商店街の人通りが少ない。
- ・集客、インバウンド消費をどう取り込むか。
- ・外国人への対応ができているお店が人気があるのではないか。
- ・組織のありかた、組織、組合のまとまり。
- ・組合へ入るメリットについて。
- ・不動産、集客、組織のありかた、商店街の中のメンバーの顔を知らない。
- ・空き店舗の問題。
- ・店主の高齢化、商店街に行く目的がない、行きたいと思う店舗がない。
- ・情報発信が足りていない、商店街がしているつもりでもそれが届いていない問題。
- ・思考が固まっている、時代に乗れていない、そのような世代の方が多い。
- ・組織の団結力が弱い。



○飛田先生

・付箋に書いたことは、これから乗り越えていくべき課題であるが、自分達が常識や正しいと思っていることをどう乗り越えていくのか、「アンラーニング」（今までの常識を乗り越える）がキーワードである。

・そのためには研究することが大事であり、研究は勉強と違い、誰も知らない新しい事実を発見し、それが価値のあるものであるということを示すことである。



○杉本先生

- ・価値を転換する視点が大切であり、今までと価値観が変わってきている中、これまでモノを売ってなんとか生きてきたものを、目には見えない、人と人とのつながりや経験、体験が大事になってきている。
- ・木藤さんが油津でされたことは、価値観を大きく変換したことにあると思う。
- ・時代に合った商店街について考えていくべきことが必要であると思う。



○今村部長

- ・1期生の活動状況や、今日のメンターとして対話を促す姿をとてうれしく思う。
- ・今日の2期生の熱意を見て、昨年以上にもっと成長できる可能性があると感じた。
- ・昨年の研究会での試行錯誤を踏まえ、また違ったプログラムも提供できると思う。

